

まちなみ発見七尾 2000 能登はやさしや土までも 伊達 美徳

和倉温泉は温泉宿しかないのか

2000年7月、能登の七尾市に行ってきた。市の総合計画見直しにつき、職員の研究をするとして、講師の一人として招かれたのだ。

研修ついでに能登観光と地元視察しようとして、2日前から市内の和倉温泉に泊まって、周辺観光地や市内を見てまわった。

和倉温泉は有名だが、街には見るところがなんにもない。海べりは旅館が占領していて近づけないし、実につまらない。タクシーに乗って、和倉の名所はどこかと問えば、温泉の湧き出しているところに連れて行ってくれたが、えっ、こんなのが名所なの？。しょうがないので能登島まで行って観光したのであった。

老舗の丁屋という旅館に泊まったが、個人客なのに団体客の宴会と同じ料理を食わせられて、文字通り閉口した。料理は多すぎるし、出てくるペースは遅い。個人で食卓についてもとても食べきれないし、間が持たない。あしたはもう勘弁してねと女中に言っておいたが、やはり同じ。調理場が団体客にしか対応できないらしい。これでは個人客は一度と泊らないだろう、少なくとも私はもう来ない。

夜の露天風呂から遠くに花火が上がっている。あれはなにと宿の人に聞けば、七尾港の花火大会ですという。そんなイベントあるのに、なんにも案内がないのはどうしてと聞けば、あそこは七尾だから。それはないよ、同じ市内だろう、花火見物特別バスでもだすのが普通だろうに。

どの宿も客を閉じ込めて外に一步も出さない仕掛けだ



中心街には土蔵造りの美しい街並みもある



中心街を流れる御蔵川をまちづくりの種に、



七尾も一歩郊外に出るとこんな汚い街



中心街は、美しい伝統的な街並みが連なる



から、これならと熱海とかわからない。その熱海は、いまや目を覆つ惨状である。

七尾の中心街は見るものが多いのだが

さて、七尾もやっぱり、この地方都市でも起きている問題が丸見えである。

七尾駅の観光案内所で、街の中を観光したいのですがと問えば、「街の中にはなんにも見る所はありません」というのだった。その声を後にして、七尾の中心街を歩けば、まだまだ伝統的な美しい街並みがあり、商店街には魅力的な老舗もたくさんある。観光案内所は知らないのか。汚れているけど水流もある。観光案内所は知らないのか。暮らしたよさそうな街だ。だが、人通りがない。聞けばこが人口減少一番だと言った。

新しい高速道路ができることで、七尾市郊外にインタチェンジが新しくできるから、その周辺やとりつけ道路沿いの新開発を誘導するらしい。市の人口は、これまでは奥能登地方からの流出を受け止める形だったが、これからはそれもできなくなってきたから、減少を止めようもない。それなのに、中心市街地を空洞化しながらの拡大型都市計画が止まらない。

新しい県立美術館や総合病院も、街外れに建てている次第にすつすつと稀薄な街になっていく。

里地・里山の美しさ比べて、市街地の汚いこと、とりわけ街外れの幹線道路沿いのあまりのひどさに、「能登よ、おまえもか」と悲しくなった。どうして今まで育ててきた美しい伝統的な市街を見放して、こんな汚い街をつくるのだろうか。「能登はやさしや土までも」と言っただそつだが、わたしの能登は哀しかった。

これから中心街が大切なもの

日本でもイギリスでも、田舎に暮らすことが流行になりつつあるという。人口流動の大勢からみて、それは本当だろうか。少なくとも私はあのような汚い田舎の郊外街に暮らしたいとは思わない。

たしかに誰しも自然に囲まれた美しい里地で暮らしてみたいという情緒的あこがれはあるだろう。だが本当に田舎に暮らせる人がどれほどいるだろうか。

中心街よりも更に寂しいのが里地である。そこに本当に暮らせるのか。こどもの教育は自宅教育か、食べ物は自給自足か、医療はどつする、など考えると、それをや

れる人は金持ちか、それとも思想的にも技術的にも自然の中での暮らしを確立した人だろう。日本人全体から見ると、それはごく少数だろう。

もしも多くの人がそれを望んで里地に住み着いたら、それは里地環境を失うというジレンマを招くだろう。政策論としては、街暮らしが基本となり、里暮らしが特殊にならざるを得ない。

ある夏、若狭の町と村をしらみつぶしに神社を訪ねたことがある。目的は能舞台探しであった。巡る集落に、汚いが海水浴客で賑わう漁村と、美しいが寂しすぎる農村の対比をつくづく感じた。どこでも漁村は「ちやちや」と集まる集落をつくっており、これに海水浴客用の宿泊所を勝手に増築するから、むちゃくちゃな風景となる。

農村は農地の広がりの中にぼつぼつと集落がはめ込まれているし、人がこないから増築どころか家屋がなくなるから、風景は美しく保たれる。どちらにいても人が幸福なんだろうかと、どちらが生産力があるのだろうか、どちらが優れた人間環境だろうか、考えこんだが、未だに分らない。

なお、七尾市の研修会の話だが、人口については減少せざるを得ない方向で政策を見直したい旨を、市長が職員の前で発言されたので、新たな時代の都市政策が始まりそうだ。(2000.07)

どぶ川サミットの川端さんと松松さん

2000年9月23日、熊登の七尾市で「熊登国際ナント村2000」なる催しがあり、その中の「全国どぶ川サミット」に野次馬で顔を出してきた。

「国際」対「テナント村」といい、「どぶ川」対「サミット」といい、月とスポンをわざと組み合わせたところが面白い。名前の壮大さと反対に「じんまりながらも」はりきった市民団体の主催で、なかなか良かった。

どぶ川サミットを開いたゆえんは、七尾の街のまなかを御被川(みそぎかわ)というどぶ川がながれていて、これを街の環境改善と活性化の軸とする街づくりが進められているからだ。サミット出席の他のどぶ川都市は、近江八幡市、柳川市、新潟市、横浜市だった。

なかでも興味深い話題を提供していたのは、近江八幡市長の川端五兵衛氏だった。

「ゴミで埋まっていた八幡堀を復活する運動が街づくり運動へと展開していく様子を語られるとき、まちづくりの持つ本質を突いていくのだった。

「なんのために堀を復活するのか」と問い返されたときに真摯に悩み、「堀をゴミで生めたのは誰の責任か」とみずから市民生活の姿勢を問い直し、「堀を復活



するには堀の外堀を埋めよ、つまりまちづくりから迫ることに生きつくのである。堀の将来姿を街の将来像にほめ込んでみて、復活する姿が最も美しいと知り、復活運動へとまい進したであった。

川端さんの話に「暮りて良い街をつくれば、観光客は後からついてくる」とあった。これはわが意をえた。このころわたしの提唱している「生活観光」である。やはり先人がいたのだよ、うれしかった。

柳川市の広松傳さんの話でも、柳川の掘り割り復活のための町内住民による清掃運動の時「観光のためじゃなく、自分の家の庭をきれいにしよう」と呼びかけたのだそう。今の有名な柳川掘り割り巡り観光は、その一つの結果にすぎないのである。

川端語録でもついつい面白かったのは、「死に甲斐のあるまち」だ。「生き甲斐」ならわかるが「死に甲斐」とは、市長として穏便でないので直せと、議会系からも迫られるそう。

川端氏曰く「生き甲斐はいろいろなまちで何回も探せるだろうが、死に甲斐はひとつのまちで1回だけだ、この街で死ねて本当に良かったと人生最後にいえるまち、それが近江八幡でありたい、と語っているのだが、わかんひとがおおいなあ、でもことごとく論破してまっせー。なるほど面白いなあ。」

シンボルロード、食祭市場、駅前再開発

さて、七尾の街のどぶ川の御被川だが、「ふるさとの川づくり事業」でハードな環境整備がおこなわれているが、水質の浄化はこれからの下水道事業をまつことになる。

川沿いの街づくりは「シンボルロード事業」が川に沿って事業中だし、町並みづくりは、第3セクター「七尾街づくりセンター(株)」と民間セクター「御被川」とが役割分担しながら、行政と組んで進めているようだ。

「御被川1号館」というギャラリーと会合の場をオープンし、2号館、3号館と店舗を開いてきている。中心市街地活性化にどう展開するか楽しみだ。

シンボルロードも御被川も街並みも計画中で、姿はいまだしたが、西端には七尾駅前の大規模商業再開発、東端の港には「熊登食祭市場」と名づけたフィッシャー・マンズワープができた。

気になるのは、駅前再開発の第2弾の内容と行方だ。今、七尾の街に必要なことは、中心市街地居住の回復である。それが中心市街地活性化の基本であり、そのためには、それを支えるコミュニティ施設を中心市街地に整備することだ。

しかし現状は、美術館、生涯学習センター、文化ホール、総合病院、短期大学、地方合同庁舎、市民体育館、社会保険事務所、警察署など、どれもこれも街はずれである。市役所が街なかにあるのが、奇跡なくらいである。さて次はまさかと思いが、古く狭くなった中央図書館の郊外移転だろうか。これこそ駅前再開発に持つていってほしいものだ。町田市や川崎市の駅前再開発に図書館をいれているが、大勢の市民がやってきて活発に利用されている。利用されてこそ、市民施設である。

街はずれの県立七尾美術館で、ここ出身の江戸期の大画家・長谷川等伯の襖絵の展覧会が催されていた。日曜の最終日、まことにひっそり静かな会場で鑑賞しやすかったが、もったいない。(2000.09.30)

街並み発見 七尾 2006 港と街の都市デザイン 伊達 美徳

2006年3月、久しぶりに七尾を訪ねた。「どぶ川サミット」の2000年以來、6年ぶりである。七尾の中心市街地がどんなに変わってきたのか、あるいは変わっていないのか、期待半分であった。

今回は七尾マリンシティ協議会主催まちづくりシンポジウム「七尾はどかどかどかへ行こう。激動の時代を乗り越える海図を描け」のパネルディスカッションに出演するためであった。

地元の活動家たちによる「中心市街地の今を見つめる」と題する四つの活動レポートは興味深かった。確実にまちづくりが動き出していることが分かる。

パネルディスカッション出演は、今野修平先生の仕切りで、港湾都市七尾らしく港湾の専門のお方二人、七尾青年会議所のお方、そして都市の専門の私だった。

私は前の日にやってきて七尾の街なかのビジネスホテルに泊り（普通の人は和倉温泉に泊るのだが）、バスにも乗り、街中も歩き回り、6年ぶりの変化をつぶさに見ていたので、その間の動きに感心してはいたのだが、発言となるとつい、いつもの辛口になってしまった。

これまで七尾について2000年レポートをしているので、ここに七尾2006レポートを書こう。なお、私は七尾には2000年11月にも来ています。

まずは、このシンポジウムのために事前に書いて送ったメモから始めよう。「ここに七尾に対する私の基本的な考えがあるのだが、現地でこれがどうか検証してみたかったのである。なお「マリンシティ」ではなく「マリントウン」と書いたのは、対象が行政区域全体ではなく七尾中心市街地だからである。

***** (事前配布メモ) 中心市街地再生からみる七尾マリントウン

七尾のマリントウン構想の実現は、七尾市の中心である中心市街地の活性化と表裏一体の位置づけにあると見られます。七尾市の中心市街地の活性化はうまくいっているのでしょうか。2001年に立案された「七尾市中心市街地活性化基本計画」はその後のフォローアップはどのようなのでしょうか。

この計画を見ると、七尾市全体の人口も減っている、中心市街地の御機と袖が江の西地区の人口も減り続けています。でも、人口が減っているといっても、他の地区と比べると断然人口密度は高く、中心市街地は七尾市のコミュニティ中心の地位を保っていることが分かります。

2001年策定の中心市街地活性化基本計画で列にすることがあります。それは中心市街地の商業振興策はあるのに、肝心の居住環境向上策が見られないことです。

中心市街地が活性化するのは、「ここに人もそこに住民がいることです。商業振興は住民がいてこそまず基礎体力が保たれ、これに広域の来客が付加価値として存在することが基本的なシステムと思います。それなのに居住政策がなくて商業政策だけでは、活性化は成り立たないと思つています。

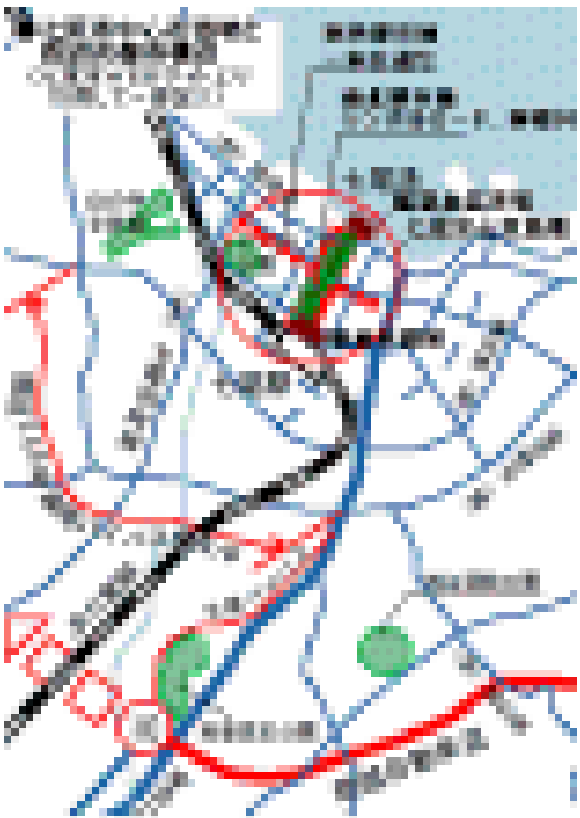
この問題には、実は全国各地の中心市街地活性化基本計画に見られています。そして今、各地の中心市街地活性化計画のほとんどが成功して

いない有様です。基本的なことが間違っているのです。まず生活環境の良好な中心市街地をつくるのが先であり、それに伴って住民が増えてくれば、商業はおのずから活性化されるものです。今大都市では都心回帰が起きていますが、地方都市でもその波が起きています。今年は大雪でしたから、雪国では郊外から中心市街地居住へと移動が真剣に考えられています。超高齢社会がもつてくると、郊外に拡散して暮らすよりも中心街に暮らすようになるでしょう。もちろん郊外や山里に暮らすのがいけないのではないのですが、そこに暮らすにはかなりのコストがかかることを覚悟するようになるでしょう。

今の国会に、都市計画法と中心市街地活性化法の改正案が上程されています。この二つの改正の基本となる考え方は、明確に郊外開発の抑制です。これまでのような拡散した市街地では、これからの成熟した高齢社会としてエネルギーや人間の生態環境にも配慮しなければならぬ時代となつては、地域が持たないとの危機感が背景にあります。

地方都市では、未だ郊外開発が進んでいるところがあります。あるところの市長さんは、郊外開発をすれば開発地の地価が上がって固定資産税が入るようになり、財政が潤うからだとおっしゃいました。なるほど、任期の4年くらいではその効果があるかもしれませんが、総じて人口が増えないのですから、中心部の人口が郊外に移るので、今度は中心市街地に地価が下がるのです。そのマイナス効果が出たときにはもつて拡散した街を再生することはできないでしょう。そのまま人口が減るとすると、ますます希薄に拡散した街になり、その街の維持のための費用は市民の負担としては過大なものとなるはずで、そのような愚かな未来像を描きたくないものです。

七尾市の中心市街地の再生は、一本杉通りを中心とする伝統縦軸と、シンボルロード（個性的な道路名をつけて）の先進横軸の整備はこれまでに商業政策として進められてきましたが、これからはその軸に囲まれた各街区内に生活する住民たちの居住環境の再整備が最重要課題と考えます。その住民たちが主体となり自らの生活の場作り計画を進め、行政はその事務局の手足として働く、そのような仕組みづくりが必要なくらいでしょう。あてにならない観光客のためのまちづくりは、もつ止まじょう。ここに暮らす住民・市民が自分たちのための暮らしやすい美しい街をつくり、自分たちが毎日観光しながら暮らしたい。住民が毎日観光するほどの環境の良い美しい街にならねば、来てはしくなくとも観光客がやってきます。増えてはしくなくとも住民も増えてきます。私が住んでいた鎌倉がまさにそうで



すし、今住んでいる横浜都心もそうです。身近に文化施設も病院も学校も商店街も公園もある七尾の街、そして毎日楽しめる海のある街、「ここ」に、まさにマリノタウンのコンセプトが見事に生きてくれていると思います。(2006.3.11)

街のマップができた

ここからは、シンボルジウムで私が話したことを素材にして、話し足りなかったことを加えて書く。七尾の街が大好きになってしまったよそ者が見た、2006年の七尾の街へのエールと苦言である。そういえば、2000年の研修会のときも、既に書いているような辛口を市の職員の前で話した。

こんどは能登空港から「ふるさとタクシー」なる相乗りタクシーで七尾駅前までやってきた。空港を降りて七尾行き空港バスがないのでどうしようかと思ったのだがこの乗り合いタクシーシステムは、タクシーだからバスと違って行き先まで届けてくれるし、料金も多分バスなみだしサービスもそれなりによかった。

七尾駅に入り、観光案内所に行けば誰もいない。案内パンフレットさえもない。JR駅だからだろうが、七尾から外に行けというパンフばかりで、七尾の案内は能登食祭市場パンフだけであった。

以前にはなかったが、今度はこの街の歴史、ランチ、寿司等のテーマ別案内図ができてはいるはずなので、それを探したのだが、みあたらない。結局この地図は後で発行元の拠点「しるべ蔵」で手に入った。

このマップはアクソメ鳥瞰図法のなかなかの力作で、街の様子がよく分かる。特に縮尺がいい加減でないところが気に入ったが、スケールバーがないので距離が分からないのが残念である。次の列車まで1時間、この間にどこまでなら行っても大丈夫か、そんなことが分かることが観光地図には重要なのだ。

私には、「歴史建造物マップ」があることがうれしい。この街にはこんなにも立派な街並みがあるのだ、それはこの街が豊かな証拠なのだ、誇りに思っただけではないのだ。できれば、食祭市場のような新しい建物も入れて、ゲッ下デザイン建築マップもほしい。

七尾市には「景観賞」のような表彰制度はあるのだろうか。あるならそこで表彰された建築や風景をマップ化するのである。

公共交通 自動車と醜い風景

ではとりあえずは街の全体像を見よう。駅前から「まりん号」に乗った。中心市街地と郊外の主なところを8の字にまわって、観光、買い物、医者通い、市役所や文化施設行きに役に立つ。

朝9時から午後5時までで、1時間に1本しかないのが欠点だが、安くて便利だ。もっと増やせないものか。

わが七尾最大のお気に入りの「山の寺」で降りて、次のバスまで1時間をひと巡りした。なだらかな緑の丘のあちこちに配置された寺院をめぐるコースに、つぎつぎと美しい風景が展開

してくる。七尾でピカイチの観光の場だが、積極的に売り出す気もないのか、ちょっと荒れているといつか、よく言えば素材すぎるというもあつて、それが良い。ここは歩いてこそ楽しむことができる。

8の字を全部回ってバス観光すれば、郊外部の沿道風景は、派手な広告と妙な建物でやはり醜いのだった。

こんどは「能登食祭市場」で降りたのだが、なんだか市場と関係ないところに停留所がある。初めての観光客はつるつるするだろう。食祭市場に行くには、いくつも横断歩道をわたる必要があるのだ。これでよいのか。まんな前に入っただけではどうか。

どうもバスの停留所の作り方が、利用者のためというよりも、車の回し易いところにつくられるらしい。駅前まりん号乗り場も、どこにあるのか、しげしげと眺めて、ようやく分かったくらいだ。能登バスの乗り場だって、駅前からぐるりと回りこまなければ行けない。

近頃思いついたのだが、日本の街や郊外の風景が醜くなってきたのは、自家用車の普及と大いに関係があるらしいということだ。歩いてみれば醜さが分かるのに、車で行けば、とにかく道を間違えないように目的地に着くための目印ばかり探していて、風景など見る暇がない。人を引き寄せたい商業施設は、車のスピードでも見えるように、とにかく目立ちたがり屋のはずでいい。結果として見るほうも作るほうも全体的な調和に気がつかないままに、醜い風景を作り上げてしまう。郊外の沿道風景が特に醜いのはまさにこの結果だ。

自動車社会だからそれで良いのだと言っているようでは、その都市・地域の品格を問われる。

街の南北軸 川とシンボルロードの都市デザイン

2000年にあった「どぶ川サミット」の川である御抜川とそれ沿いの道路の整備をしている。御抜川はふるさとの川整備事業、道路はシンボルロード事業というそれぞれ国庫補助事業で、かなりの投資をしている。

この川と道を、駅と港を結ぶ南北の軸として事業の最中である。さてどんな形になるのかできあがりが見えませんが、都市デザインとして気になることもある。





御被川の修景護岸が、見慣れない赤い石積みである。インド砂岩のようにかなり赤いのだ。こんな石が能登に出るのだろうかと後で聞けば、中国産（紅霞石）というのだそうだ。これを選ぶにはそれなりの市民参加の手続きがあったらしいが、それにしても地元産でなくて、今後の汚れや破損のメンテナンスに不都合はないのだろうか。風景としても、アクセント的に使ったのならともかく、これだけたくさん使つて、見慣れない不自然さがある。川岸には階段やいすなどが赤い石で作つてある。ここは休むところ、ここは見物するところ、ここは船着場の復元と用途を決めているらしい。その努力とデザインの上手さは認めるが、どうも仕掛けをしすぎの感もある。

一般に土木デザイナーは、どうも飾り立てることがデザインだと思つている節がある。何もしいのがいいのではないが、すっぴんの美しさがあつてこそ、ポイント的な装飾が映えるのだ。もっとも、そのすっぴんの美しさをデザインするには、能力がいるのだ。

橋のデザインに、泰平橋「あかりの橋」、長生橋「かおりの橋」、慶応橋「かざりの橋」と、それぞれテーマを持たせて、抑制と強調がバランスよいデザインだ。

ところで、長生橋は昔は太鼓橋で、「こを青柏祭の」でか山」が渡るのが見ものだったらしいが、それなら、橋の一つくらいは太鼓橋にしてもよさそうに、とも思つたのだ。

シンボルロードと御被川のデザインは、同じデザイナーなのだろうか違つのだろうか、違つなら協調しているのだろうか。

道路となると道路構造令という規則が登場してきて、自動車交通優先になる傾向がある。歩道も広いが、車道も広すぎるのが気になる。この道が街の中を車が大量に通るだけの交通路線となつては、これまでの歴史的に続いてきた東西方向に連携する街並み、商店街、コミュニティを分断することになるが、大丈夫だろうか。たとえば車道を蛇行させるとか、停車帯を少なくするとか、もっと交通流を制限する形はないものか。

歩道が広くなり、街路樹も植えてあるがまだ茂る季節ではないので寒々としている。でも、もっと樹木があつ

てもよいだろうし、常緑樹がないらしいのも気になる。広い歩道に通して2列植樹して、駅から港まで緑に覆われた公園通りにすれば、すいぶん気持ちが良いだろう。それも常緑と落葉とを混植すれば、四季を通して楽しい。この緑が東西の街をつなげる役割を持つようにしたい。樹木が青柏祭挽山に邪魔ならば、自動車交通止めにして車道を通ればよいだろう。

川沿いには石の椅子、歌碑、解説版、アート作品、カ山の車などがあちこちにあるのだが、それらのデザイン総合マネージメントができていないらしく、漫然とあるいはこちゃこちゃと配置されている。さらに変圧器、交通規制標識、照明ポール、車止めなども混じつて、せつかつのアート作品も生きている。整理してはどうか。楽しみなのはこの道路沿いの街並み形成である。この道路拡幅でいくつか特徴的な建物が壊されたが、一方では七尾らしい街並みが再構成されつつある。道路沿いは高さがある程度そろえて、平入りの傾斜屋根とすることなどの、街並み誘導を決めた都市計画の地区計画が定められていることは心強い。

御被川沿いの街並み形成



道路だけつくっても、市民が七尾のシンボルと思うような都市の中心軸にはならない。並木の緑と街並みづくりに、今後を期待している。それには株式会社御被川やまちづくりNPOのような、民間市民組織の活躍が重要な役割を果たささう。

熊登食祭市場 港から街への都市デザイン

シンボルロードの両端に、南に駅と駅前再開発、北に港と熊登食祭市場という拠点を、それぞれ持つ構成になっている。駅前の第1地区の商業再開発は完成し、第2地区再開発の複合建築と駅前広場と都市計画道路が事業中である。

七尾で泊るとなると和倉しかないといってもよいほどに中心街のホテルは粗末だが、第2地区の再開発にはシティホテルができるらしく楽しみだ。また、前に来たときに心配した図書館は、郊外移転せずに駅前再開発ビルに入るようで、これもよかったことだ。完成すると七尾らしい歴史の街をイメージさせる景観が、駅前に出現するだろうと期待している。

もつひとつの北の拠点の熊登食祭市場は、建築的にはよくできているし、中の業態も面白いのだが、問題はその周辺環境である。

七尾港湾環境整備事業として港の公園「七尾マリンパーク」ができて、道路と公園が完成していた。どちらかといえばイベント広場型であり、これは夏のジャズフェスティバル向けだろう。しかし広場に樹木が植わっていても良いだろうに、木陰をもつ憩いの場となる緑地はごくわずかであるのが、私は不満だった。

そして食祭市場は、建築計画では街側が表玄関となっているのに、公園の環境計画では海側が表になる空間デザインとなっているのだ。市街地側は裏口になって、シンボルロードからの景観もアプローチも美に良くない。

シンボルロードからは、幹線道路を渡って、さらに車アクセスロードを2回もよぎらなければ到達できない。しかも、駐車場が街の側を向いて丸見えだから、まるで郊外ショッピングセンターのような殺風景さである。こ

こにも緑がないのである。せつかくの良い建築が泣いている。港のデザインと街のデザインが、ちぐはぐになっている。事業制度が違うからとの言い訳は通じない。いつも思っただが、駐車場はどうしてあかも殺風景に作るのだろうか。あの周りにも中にも樹木を植えるとすいぶん街は美しくなると思うのだ。ここにも車に乗った人は、美的感覚を失うことがうかがえる。

できるならば、シンボルロードの並木の緑を、食祭市場の周りまで連続させてほしい。駐車場の周りも中も樹木植えてほしい。市場正面を車広場じゃなくて、緑の歩行者広場にしてほしい。要するに、シンボルロードの正面にあって、あそこに行ってみたいなあと思える、人を迎え入れる風景にしてほしいのだ。

食祭市場の中にも注文がある。以前に訪ねたときに七尾仏壇の展示をしており、その職人が名上の技を見せていたのが強く印象にある。あのような地域ものづくりの動きを見せてほしい。たとえば和蝋燭、ガラス工芸、銘菓作りなどがあるだろう。

街の東西軸 一本杉通りの夜の都市デザイン

さて辛口ばかり述べてきたが、最後にこれはすいと驚嘆した都市デザインができていたことを紹介したい。七尾の街の最も中心的な商店街「一本杉通り」の夜景である。

ビジネスホテルの夜はつまらない。8時ごろ街にふらりと出かけて川沿いをぶらぶら行けば、赤い石垣と水面に映る灯影がそれなりに美しい。もつ商店は閉まってしまい、ずずらん灯がむなし。

一本杉通りにやってきて、見ればあまりの暗さに、一瞬これはどうしたかかと思ったのだが、他の道とはまったく異なる懐かしいような雰囲気漂っている。

街並みのファサードと石畳の面を、ほのかに照らすと、いつよりも、ほの暗く連ねて見せている灯りの列が、人を導くように道沿いにパースペクティブに並ぶ。ちよつと幻想的な夜の美しさに、ふらふらと道に迷い込むような気分になった。唇はまったく気がつかないことだった



街から見る食祭市場は裏の顔



海から見る食祭市場は表の顔



一本杉通りの伝統的な商家建築



一本杉通りの美しい夜景は写真ではとても表現できない

2006/4/15

それは、上からの照明をとりはらってしまい、置き行灯型の照明箱を、それぞれ店先の道沿いに並べているからだ。

数年前に但馬の温泉町で、小さな雪だるまに灯を入れて店先に並べる夜のイベントがあり、美しかったことを思い出したが、これはイベントではない、日常であるところがすごいと思う。

もっともこれには、悩ましい問題がある。この照明が美しいということは、8時にしてもう店が閉まり家からも明かり漏れ出ないことであり、それは商店街として果たして良いことだろうか。

昼は昼で石畳となったその街並みの伝統的風景に驚嘆し、夜は夜でその灯りの美しさに驚く、やっぱり一本杉通りは私の大好きな街である。

たぐさんの登録文化財になる伝統的商家が立ち並び、そこには地元で根ざした商いがあり、生活がある。見ているだけ、この街がいかに栄えていたかよく分かって、こちらでも豊かな気分になる。

七尾は能登で生き残れるか

今回のシンポジウムのテーマは「七尾はこれからどこへ行く?」とあったが、七尾市のさまざまな市民活動の展開を報告された。

元気ななお仕事宿の内山さん、一本杉(花嫁のれん展)会長の北林さん、でか小屋再生おせっ会の鳥居さん、(株)御坂川の森山さん、それぞれの活動を聞いたが、いずれもまことに興味深いものであった。街の伝統建築を積極的に文化財登録しているのも、でか小屋のような文化を掘り出すのも、実はこの街に誇りを持つとすると未来志向の運動であり、これからの七尾への希望を膨らませたのであった。

七尾の街で、暮らしやすいまちづくりをしよう、多くの市民団体が動いていること分かったことが、今回の大きな私の収穫であった。

これから人口減少と超高齢化が急速に進むと、今のよりに拡散して暮らすことはかなり無理となり、暮らしやすい都市へと人口移動が必ずおきてくる。そのときに能

登半島では七尾が選ばれるのか、それとも金沢に行ってしまうのか、これから都市の生き残り競争となる。半島の北部およそ20万人の人口の受け皿都市に七尾はなりうるだろうか、近江八幡市の川端さんが言った「死に甲斐あるまち」かどつかが、もう問われているのだ。

(2006.4.15)

参考

まちもり通信サイト

<http://homepage2.nifty.com/datey/>

景観文化論サイト

<http://homepage2.nifty.com/datey/keikan/>

奥能登

<http://homepage2.nifty.com/datey/keikan/okunoto2004.pdf>